

<研究論文>昭和一〇年代の国民文学論 : 文学場のインターフェイス

著者	松本 和也
雑誌名	日本研究
巻	59
ページ	91-122
発行年	2019-10-10
URL	http://doi.org/10.15055/00007327

昭和一〇年代の国民文学論

——文学場のインターフェイス

松本和也

I

日本近代文学史において、たびたび議論されてきた主題（のつ）に、国民文学論がある。この論題について、内藤由直に次の概説がある。

日本近代文学の歴史を振り返れば、国民文学とは何かを問う議論は一八九〇年代半ばにその端緒を見出すことができ、日中戦争下の一九三〇年代後半および戦後占領期の一九五〇年代前半にそれぞれ一大論争を引き起こしている。各時代の論争には

数多くの作家や批評家、そして研究者たちが参加したが、往時の国民文学論を一瞥すれば、そこでは論者によつて各人各様の国民文学概念が提起されていた。^①

もちろん、内藤もこうした祖述につづき、「明治期から昭和期に至る国民文学論を一連のものとして把握する認識」に関して、「各時代の『国民文学』という用語に内包される概念の相違を十分に吟味することなく、それぞれの時代情況において亢進したナショナリズムの単なる反映として国民文学論を捉え、国家主義を宣揚する文学論の系譜と見てしまうこと」を「大きな問題点」として指摘している。^② そうであれば、国民文学論を再検討する際に必要なのは、ま

ずもって、言説（資料体^{コイパス}）の幅広い調査と、フラットな視座からの具体的な分析ということになるはずだ。というのも、先行研究においては、限定的な視角・資料に即して、論者の政治的立場に即した評価が示されるにとどまり、十分な検討が行われてきたとはいえない現状があるからだ。最新の研究成果である内藤論においても、その視角は「プロレタリア文学運動」によるところが大きく、たとえば「戦中の国民文学論は、戦後の国民文学という言葉に汚れの痕跡を残すほど、戦時体制において強力な政治的機能を発揮した^③」と一面的な指摘となっている。その偏向は、戦後の国民文学論のみを積極的に評価する小田切秀雄による国民文学論への論及を並べることも、明らかにになる。

高山樗牛から太平洋戦争下にいたるまでの従来の国民文学論は、広汎な国民の平和と生活向上へのねがいと民主主義的自由への要求との全的な絶滅の上に超国家主義的な「国民」文学^④と臣民文学をつくりだそうとしたのであって、一九五一・二年にサンフランシスコ条約による民族的隷属と戦争の危機とのなかから形成されはじめたこんにちの国民文学のイデオロギイとは全く本質を異にしたものである^⑤。

つづけて、「前者が「上から」の国民文学であるなら、これは

「下から」の国民文学^⑥」だという小田切には、自発的な戦後の国民文学論を是とし、戦前までのそれを否定的にみる、戦後民主主義的な発想が明らかである。こうした史観からすれば、昭和戦前期の国民文学論は、アジア・太平洋戦争同様、歴史の暗部として全面的に否定される他ない。

こうした位置づけ・評価は戦後長らくつづき、一九六〇年代に入っても、国民文学論を論じる際には、戦前／戦後のそれが明確な是非を伴って記述されていた。「国民文学論が提起される時期は、つねに民族的な危機意識が介在している」と、戦前／戦後の国民文学論に共通点を指摘する尾崎秀樹にしても、やはり両者を対比する次の論述へと進む。

戦時下においても、また戦後のサンフランシスコ体制へと向う状況の下においてもそうであつた。ただしそのあらわれ方は対極的なもので、ひとつは日中戦争勃発（蘆溝橋事件）前後から太平洋戦争開始にいたる数年間のものだが、主として国策^{ミヤ}の戦に沿い、日本的なるものへの傾斜のなかで論じられ、戦後のそれは、朝鮮戦争からサンフランシスコ体制のかたまる過程において、民族の危機感が国民的課題としてクローズ・アップされた時期に論議された^⑦。

その上で、尾崎は「戦時下における国民文学論争は多くの問題を
はらみながらも、状況の急テンポな推移にとり残され、未解決のま
ま投げ出されてしまう」とその帰結を論じていた。また、生松敬三
は、「国民文学論」に対する批判的な意見の提出はありながらも、
形態としては必ずしも論争というにふさわしい展開過程を辿ってい
るとはいえない」と評している。いずれも、理想の国民文学実作の
出現とまではいわずとも、論争の決着など何かしらの明確な到達点
を想定しており、それゆえ否定的な評価を下したものとなっている。
そのことは、先行研究の多くが、論争として、国民文学論を捉えよ
うとしていたことにも関わる。本稿では、日本文学史上顕著な国民
文学論の二つのピークをもつ昭和戦前期のそれを、昭和一〇年代の
国民文学論と称して検討していくが、この議論は何かしら明確な対
立や到達点を前提とすべきものではなく、さらにいえば、同時代の
論者たちにとってさえそれは最優先の関心事ではなく、歴史の渦中
で国民文学を主題として何かしらを言表する行為と、それによつて
もたらされる反応や再編成等々の言説上の実践・過程にこそ歴史的
な意味を見出すべきなのだ。別言すれば、国民文学論とは、当の主
題のために書かれた内容にくわえ、その言表を通じた同時代の多様
な問題系への論及として歴史的な意義をもつのだ。そうした歴史的
様相を重視する本稿では、したがって「国民文学論」概念やその際
の「国民」概念の定義や刷新を目指すのではなく、国民文学論を同

時代文学領域の諸問題に関わるインターフェイスと捉えて、その言
説編成について多角的な分析を試みていきたい。

II

昭和一〇年代の国民文学論については、平野謙が「中日戦争勃発
前後と太平洋戦争中と、二段に分けて問題にされた」と指摘してい
るが、正確には、昭和十二年（一九三七）上半期と、昭和十五年
（一九四〇）下半期と翌年の二度のピークをもち、昭和一〇年代末
においても断続的に議論されていった。本節では、前者の国民文学
論について検討していく。

まずは、国民文学論の渦中に開催された座談会、廣津和郎・中
條百合子・窪川鶴次郎・武田麟太郎・片岡鐵兵・島木健作・阿
部知二・徳永直・中村武羅夫「文学の大衆化の問題」（『新潮』
一九三七・七）において、国民文学が話題とされた箇所を引いてお
く。

中村。国民文学といふやうなことが言はれてゐるですが、あれ
は、大衆化と関連のないことですか。

廣津。日本主義のことですか。

中村。あれは、どういふことですか。ちよいちよい言はれてゐ

るぢやないですか。

島木。国民文学といふのは、最初にそれを言ひ出した人が新日本主義といはれてゐるグループに附屬してゐる人なんだ。

(二五一頁)

ここでは、国民文学論について性格や本質が不分明なままに話題とされ、座談会タイトル通りの大衆化問題、特定の主義主張、発言者が問題にされている。「不幸なことに今日までわれわれは国民としての文学を持たなかつた、——かういふ前提のもとに最近国民文学の要望が唱へられたした」(本庄陸男「国民文学の論議」『信濃毎日新聞』一九三七・四・一七、五面)と言表される前後の出来事である。ここで、廣津と島木が念頭においているのは、昭和一〇年代国民文学論のキーパーソン、淺野晃であることは間違いない。松本欽一「現代と若き世代の意志——文芸時評」(『文芸首都』一九三七・七)に、「『日本的なもの』、『民族的なもの』との関連に於て、文学の大衆化論がむしかへされ、それらの論策の延長として、国民文学の問題が登場して来た」(九八頁)という指摘がみられる数ヶ月前、淺野晃は「『日本的なもの』、『民族的なもの』についての問題が正しく把握されはじめたことは悦ばしいことだ」と「文化時評 国民文学論出でよ」(『新評論』一九三七・三)を書きおこし、「私はさらに一步を進めて、国民文学の問題を提起したい」(三七頁)とつづける。

淺野の定義によれば、「国民文学と云ふのは名前のように国民の文学だ、もう少し詳しく云へば国民を讀者として有つてゐる文学だ」(四二頁)ということになるが、その成立条件については、「ブルジョア革命によつて身分対立が解消すると共に謂はゆる標準語が成長しその上に立つての国民教育が始められ、かくて国語が確立した」、「そこで国民のすべての階級、すべての層を通じて読まれる文学の成立が可能となり、必要ともなつた」(四三頁)という歴史的段階が説かれている。日本的なものとの関連もあり、ナショナリズムにも近い国民文学論者と目されがちな淺野ではあるが、「国民を国民としてひとたびは発言させ」る役割を「どの階級の知性が果たすか」と自ら立てた問いに対して、「恐らくはプロレタリア的なヒューマニストであらう」とプロレタリアートの役割を重視し、「其処に於いて民族的なものは最も生き生きとした表現を獲得するであらう」と述べて、国民文学とプロレタリアートを結びつけていた。さらに、淺野は「文学的諸問題は今や国民文学として展開されねばならぬ」(四五頁)と言表して、国民文学論への論及が「文学的諸問題」に繋がることまでを示していた。保田與重郎も「勝利の悲哀——明治の精神」(『文芸』一九三七・四)において、「現代の文化を思ふとき、新しい国民文学を世界の高さで求めるさきに、日本の橋を必要とすると僕は信じる」(二八頁)と言表し、国際的な尺度を視野に入れながら、日本文化の伝統を重視していく。亀井勝一

郎は「民族的なものの自覚が呼び起され、国民文学論が提唱されてゐる」、「他方ではそれへの反駁もなかなか盛んである」と国民文学論をめぐる状況を紹介した上で、「提唱者も反駁者も、自己の発見した文学上の血統をまづ示してほしい」という「註文」（『編輯後記』『日本浪漫派』一九三七・四、一〇七頁）を出していた。これは議論の公平性を期すようにみえて、国民文学（論）とは「血統―作品系列」によつて示されるべきだという亀井の史観を強要すると同時に、論者を民族主義者⇨日本主義者／欧化主義者へと二分していく明確な立場表明でもある。また、中村武羅夫「国民文学」に対する一私見」（『新潮』一九三七・九）による、「国民文学といふ以上、何よりも先づ肝要なことは、その作家の属する国家、その作品を生み出したところの国家の特徴、国の性質や、国民性を捕へて、それを拡大して描いて見せる文学でなくてはならない」（二七五頁）という一見中立的な言表も、その実、民族主義的な国民文学論といえる。そのことは、中村が「近松や、西鶴や、それから元禄時代に現はれた多くの浄瑠璃文学など、日本人の生活を描き、日本人独特の義理人情の世界を写してゐる点で、国民文学とすることが出来る」（二七六頁）と例示したことに明らかで、日本の古典文学を同時代の国民文学論に配置するには、同一民族による連続した日本文学史を前提とすることがある。さらに中村が、「近代文学になつて、島崎藤村氏の「家」だとか、「夜明け前」だとか、それから徳田秋聲

氏の「徴」や「爛れ」や、「あらくれ」や、その他の作品など、国民文学と呼んで然るべき」（二七七頁）だといへるのも、それゆえである。

また、昭和一〇年代の国民文学論を通じて参照されるドイツの事例も、民族主義的な国民文学論と位置づけられる。窪川鶴次郎は「新たな文芸思潮の要望」（『中央公論』一九三七・二）において、「今や、民族的なるものは、文芸思潮の特色としてではなく、民族的なるもののものが「文芸思潮」となうとしてゐる、といふ歴史的現象」に注意を喚起した上で、「その最も見易い事實は、現在のヒットラー治下におけるドイツ文学」（三五九頁）だと警戒している。外国文化の排斥と連動した民族主義的な国民文学論において、本来、ドイツ文学は排されるべきだが、民族主義の範として、例外的に顕揚されていく。

こうした民族主義的な国民文学論の攻勢に対し、「存在してゐものしないもの」「純粹に民族主義的なもの」を、あたかも存在するかの如く強弁し、人眼をくらまして反動精神を説教する」（三波利夫「国民文学の要望——淺野晃氏に」『文芸首都』一九三七・五、一一六頁）といった淺野論への論駁もみられたが、主にはプロレタリア文学の立場から反論が展開されていく。大井眞爪は「壁評論 いよいよ国民文学論へ」（『読売新聞』一九三七・三・一六）において「将来、それ『国民文学』が生れると仮定してそれを生むものがプロレタリア的

のヒューマニストであらうことも、ほど予想することが出来る」と予示しながらも、しかし「今日のやうに階級対立の激しくなつてゐる時云ひかへればそれだけ国民の内部に意識や感情の上での分裂が高まつてゐる時、果してそうした国民文学の成立が可能であるか、これは容易に解決のつく問題ではない」(五面)と、その非現実性が指弾されていた。あるいは、青野季吉は「文芸時評 愛国文学と国民文学」(『政界往来』一九三七・四)で、「今日あらはれてゐる素朴な国民文学論をして、その峠を越させない為めには、そのヒューマニスティクな面を当然在りうる大さにまで生長させ、そこに含まれる民衆的の面を十分に発育させること」の必要性を説き、「それ以外には、その愛国文学論化の歪曲を防ぐことは出来ない」(二二七頁)と、民族主義的な国民文学論への警戒を言表していた。

こうした声を集約しつつ、修辞までも含めてこの時期の国民文学論言説の要となつたのが、大森義太郎「文学と民族性の交渉」(『新潮』一九三七・五)である。大森は、「さきごろ来、文学における民族性の問題が盛んなる論議の的になつてゐる」(二頁)ことから説きおこし、「わが国の純文学がいはゆる私小説であり、社会的生活を描き、社会的関心を盛ることが極めて貧しかつた、また現在においても貧しい」、「しかも、大衆はさういふ社会的なものを求めつつある」がゆえに、「純文学は大衆から見捨てられた」(一〇頁)と状況把握を示す。このように、純文学と大衆(読者)との乖離を、社

会性の有無から説明するのが大森論、第一の論点である。つづいて第二の論点として「民族の文学としての国民文学の説」(一二頁)をとりあげ、「わが国においてブルジョア的な階級対立はすでに早くにはじまつてをり、近年にいたつてはますます深刻化してゐる」、「現代には、全体としての国民などとは見出されない」、こうした「現実の地盤」において「国民文学生れなどと云ふのは、無意味このうへもない」、「実に、阿呆の言」(一四頁)だと嘆息してみせる。さらに第三として、「こんにち、しきりに『国民』を云ふものがある」、「その国際的代表はドイツ・ナツイ」(二四頁)だと例示した上で、「文学における民族性を高唱してゐるひとびとの間に、かういふまがうかたないナツイ文学の主張がかくされてゐることは、我々の深く注意しなければならないところ」(二五頁)だと警告を発してもいる。してみれば、大森は(純文学畑の)民主主義的な国民文学論を、その社会性の欠如、現実誤認、国粹主義的な傾斜の三点において全面的に批判したことになる。これをうけて、すぐに新宿兵衛「壁評論 国民文学論は阿呆?」(『読売新聞』一九三七・四・二〇)が発表され、国民文学論一般を否定しつつも、「国民の最大多数たる勤労大衆によまれる文学をといふ意味で、それでこそプロレタリア文学を通過して今日にいたつたこの国の文学が、当然要求す可き新文学の道であらう」(五面)と、プロレタリア文学の彼方に理想の国民文学が幻視されもした。

青野季吉は「文芸時評 民衆の要求を」（『帝国大学新聞』一九三七・五・三一）において、「国民文学論といふのが、最近、文壇の問題と成り、一部の人々の要望となつてゐる」、「若い人々にはこの提論がかなり魅力をもつて浸潤してゐると聞いてゐる」と、再び国民文学論に論及しながら、「この「新」文学論は、重大な一つの現実の処理に致命的な蹉跌を見せてゐる」として、「今日の階級現実」を指示し、「現在、国民文学が在りうるとすれば、それは国民の最大多数者たる勤労・無産大衆の全体に働きかける文学を措いて外にはない」、「だが、その文学の正しい名は国民文学ではなく民衆文学」（七面）なのだと改称を提案する。

別の角度からは、三木清が「新しい国民文学」（『短歌研究』一九三七・六）で、「万葉集の如きは立派な国民文学」（八二頁）だと例示しながら、次のように言表している。

小説その他の文学領域において今日国民文学を確立することは容易な問題でないにしても、幸に短歌は我が国民のすべての階層に普及し、あらゆる種類の人によつて制作されてゐる文学である故に、先づこの領域において新しい国民文学が現はれることが考へられ、そして新万葉集によつてそれが実現されることを期待したのである。（八三頁）

こうして三木は、プロレタリア文学的な階級意識をもちこむことで、階級の別なく国民が平等に共有できる文学を模索していたことになる。

こうしたプロレタリア文学の立場からの国民文学論としては、国民文学論の隆盛に先んじて発表されていた高倉テルの議論も見逃せない。高倉は「日本国民文学の確立（下）」（『思想』一九三六・九）において、「どこの国においても、文学発展の、したがつて文学大衆化の重要な一つの段階として、国民文学の確立とゆう時期がある」（三三六頁）とした上で、「日本国民文学の確立わ、大衆の立場からの標準日本語の統一とゆう国語の問題と、それお書き現す手段としての国字の問題と、この二つの問題と固く結びついて居り、その解決おキソとして、その上に初めて成り立つものだ」（三四七頁）と指摘していた。これは文学大衆化論、文学を享受する国民・読者層を問題化した先駆的なプロレタリア文学の立場による国民文学論で、その将来的なプログラムは次のように提示されてもいた。

作家が、大衆の体の底に隠れている、基本的な要求お見つけ出して取り上げ、これお具体的に躍動させ、解決してやり、そして、それお、大衆の最も要求する「書き方」で表現する時、そこに初めて、その作品お中心として、読者層の編成替えが行われる。それこそが、文学の大衆化であり、文学の発展だ。（三五二頁）

してみれば、民族主義的な立場／プロレタリア文学の立場双方とも、国民文学論言説の急所は国民・大衆という概念＝用語の捉え方にあつたのであり、その内実をめぐる理論的・実践的な国家（権力）／大衆間の綱引きが、国民文学論の隠された動因だったのだ。

先の大森論に素早く反応したのが林房雄で、「文壇輿論の無力【二】——国民文学の可能性」（『報知新聞』一九三七・五・一六）では「左翼の文士論客は一斉に反対を唱へ、現代日本においてかゝる説をなすことは、明らかな反動の線に沿ひ、暗黒なる勢力を支持するものだ」と攻撃してゐる」（五面）と現状把握を示す。つづく「文壇輿論の無力【三】——国民文学不可能説」（『報知新聞』一九三七・五・一八）で林は、「国民文学」の主張は、現文壇の異端、「阿呆の言として嘲笑されてゐる」と大森論に直接論及しながら、「にも拘はらず、主張者と実戦者は増して行くであらう」（五面）と、追いついて感ずてであらう、国民文学論の隆盛を予言していた。浅野晃も「国民文学論の根本問題」（『新潮』一九三七・八）において、「国民文学」といふことを云つたら、実にどうこうと反対論が出て来た」ことにふれ、その理由を「国民といふ言葉が今日ではファツシズムといふことと同じ意味にひびくから」だと捉えていた。ただし浅野は、それが「進歩的」なインテリゲンチアの諸君の耳にさうひびくのであつて、「国民」の耳にさうひびくのではない」（二七六頁）と、受容層の峻別を強調しながら、次のように述べていた。

今日、われわれが自己を知ると云ふとき人間としての、個人としての、民衆としての、階級としての自己を知るよりもさらに深く、民族としての、日本人としての自己を知ることが必要とするのは、その為である。だから、世界的でも、個性的でも、人民的でも、階級的でもなしに、国民的なものが強調されなければならないのである。（二八四頁）

こうして浅野は、改めて民族主義的な国民文学論を力強く主張していく。

森山啓は「民族性・国民性・民衆性」（『文学界』一九三七・六）において「五月の文芸評論は依然、文芸における民族性または国民性の問題をめぐつて賑はつてゐる」という觀察を示しながら、「この議論の渦は、大きく言へば、二つの潮流の衝突から起つ」たもので、それを「いふまでもなくファツシズムとそれに反対の傾向」（二二頁）だと整理しているが、それぞれ浅野・亀井と大森に代表される立場の国民文学論とみてよい。他に、花岡淳二は「国民文学を帝國主義文学と解釈する人は多い」ことを「最近文学の諸問題（三）——国民文学に就て」（『信濃毎日新聞』一九三七・七・二八）において嘆き、「日本の作家が、日本の国民の文学を創造すべきは当然」（五面）だと、素朴な意見を表明してもいた。

こうした昭和一二(一九三七) 上半期の国民文学論言説は、杉山平助「国民文学私見」(『文芸』一九三七・七) によって整理される。「まづ国民文学とは、何であるか?」、「それについて、誰からも承認せられる判断といふものは、未だ出来上つてゐない」(三頁)と議論のスタートラインを確認する杉山は、国民文学に「二つの考へ方の大きな区別」を見出す。「その一つは、国民文学とは、ある国民の持つてゐる最高の文学のことを云ひ、これこそわが国民の文化の精髓である、と云つて他国民の前に提示し歎び語り得る文学」、「即ち、国家の代表的文学」だとして、「日本で云へば、古事記、万葉集、源氏物語、近松、西鶴、馬琴等一流のクラシックはすべて国民文学と称するべきもの」(四頁) だと具体例までを示す。この第一のタイプは、他国文学との相対的な特色の差異が、その文学作品の卓越性によって示される国民文学論だといえる。これに対して杉山は、「第二に考へられる国民文学とは、一定の目的意識を持つたもの」だとし、「その目的意識は、国家至上主義を基礎とし、明かに自己の属する国家の世界における優位を信じ、その精神的及び物質的優勝を、世界における最高の目標として観念し、全国民の精神を、その方向に対してオーガナイズするために創作せられる文学」(五頁)、つまりは民族主義的な国民文学論のことであるという。してみれば、杉山はプロレタリア文学の立場による国民文学論を不問に付し、国民文学論言説全体を政治意識(民族意識)の濃淡によつ

て二分したことになる。

また、『長篇小説』一九三七年七月号における特輯「国民文学の問題」では、青野季吉が「民衆文学への自覚」で「国民文学の主張が従来および今後のプロレタリア文学者をして、その民衆文学的自覚を呼び起すとすれば、国民文学論の提唱にもまんざら意義がない訳ではない」(四頁)と、亀井勝一郎が「民族の英雄と国民の文学」で「国民文学とは、まづ第一に民族の英雄を祭る文学を謂ふ」(四頁)と、持説を繰り返すばかりだが、中野重治が「曖昧な合言葉」において、なぜか迂回されてきた論点を指摘しており注目される。

「国民文学といふ言葉は今のところ一つの呼び声」、「一つの反動的な呼び声」(七頁) だと捉える中野は、「国民文学と呼ぶ以上は、国民の構成についての考へを彼等自身〔国民文学論者〕にも国民にも刺戟せず止むことは出来ない」として、「現在の朝鮮民族、台湾民族の運命」(九頁) に論及して、国民文学論における国民という概念Ⅱ用語の欺瞞性^{ぎまん}を指摘した。

こうして隆盛をみた昭和一二(一九三七) 下半期に、急速に沈静化していく。日本的、昭和一二(一九三七) 下半期に、急速に沈静化していく。日本的なもの、をめぐる議論も同様の消長をたどったことに鑑みれば、こと民族主義的な国民文学論は追い風がやんだことによつて失速したととれる。ただし、より基底的な契機としては、日中戦争の開戦の影響が考えられる。国民文学論といった個別具体的な議論ではなく、

戦争という現実はどう向きあうかについて、文学（者）が直接に問われる事態が出来たのだ。それでも、国民文学論という論題が消失したわけではなく、戦争状態に入った国家の国民／文学者として、いかに社会的役割を果たすべきか、という問いへと変奏されて、この時期以降の文学場に潜行していく¹⁰。

そのことを証し立てるように、日中戦争開戦から二ヶ月後に発表された「国民文学論と文学論」（『三田新聞』一九三七・九・二五）で窪川鶴次郎は、「国民文学なる名のもとに国民文学を主張してゐるものは、極めて少数のやうだ」、「然しそれにも拘らず国民文学論は、相当人口に膾炙してゐる」という、表層／深層の両義的な動向を指摘する。こうした様態を「慣用句的性質」と捉える窪川は、「慣用句的性質の政治的社会的意義——その最も現実的な意義こそ、今日の国民文学論の本質」（五面）だと断じて、文学をめぐる諸問題が国民文学論を参照点として、文学場の水面下で議論されていた様相を掬いあげていた。

以上の国民文学論を整理しておけば、第一にファシズムとみなされて警戒された民族主義的な国民文学論があり、それに対峙するうちに、第二にプロレタリア文学のエートスをひきつぎ、国民読者を重視する国民文学論が位置づけられ、その他に第三として、政治的な立場を意識することなく、代表的な日本文学を発掘・要望していく国民文学論があった。

ここから丸三年ほど、文学場の表舞台から国民文学論は姿を消す。その間、水面下の動向はもとより、間歇的な議論がなかったわけではない。林房雄は「文学と国策」（『改造』一九三八・六）において、「ふりかへれば万葉——近くは鷗外、漱石、武者小路実篤、島木健作。むしろこの単列の中に国民文学の正統がある」、「文化があり理想がある」と、万葉集以来の日本文学史の「正統」を国民文学のそれとして捉え、日本文壇に跋扈する「文化なく理想なき瑣末小説」（九二頁）を排し、「日本国民は美と健康に溢れた国民文学の出現を待ち望んでゐる」（九八頁）のだと揚言していた。また、亀井勝一郎は「英雄主義と文学」（『新潮』一九三八・六）で、「国民文学とはまづ第一に民族の英雄を祭る文学」だと定義した上で、「国民の大多数によつてまともに愛され且尊敬されるのは、危機に遭遇した民族を率ゐて立ち、そのために犠牲となつて倒れた政治的軍事的英雄」（二頁）だとして、「この忘れ難き思ひ出を、詩につくり歌に歌ふのが詩人の任務であり、それが全民族の讃歌となつたときはじめて国民文学と呼ぶうるものが生れる」（三頁）と主張する。こうして、民族／国民を混用しながら亀井は、「英雄讃歌の名作」として島崎藤村『夜明け前』、武者小路実篤『楠正成』、藤森成吉『渡邊華山』、吉川英治『宮本武蔵』、林房雄『青年』・『壮年』を例示し、「昭和年代がもつ最高の国民文学」（八頁）だと評価している。こうした議論を現代史に重ねれば、日中戦争開戦後の戦争文学となる。

亀井は「今日、日本の国民の最大関心事は云ふまでもなく戦場」だと指摘した上で、「一兵卒の英雄的行為は、おそらく様々の姿において今後日本文学の切実な要素となるであらう」と新たな国民文学の誕生を予言しつつ、「何が我々の心をうつか」、「生死の間にのみ開花する同胞愛の美しさ、その壮烈な美しさに他ならぬ」（九頁）とも述べていた。また、貴司山治は「戦争と文学者【中】——国民文学樹立へ」（『読売新聞』一九三八・七・三〇夕）において、「文学者がもつと国家そのものに近より、政治的関心を持つて仕事をする」と（四面）によつて、戦争をモチーフとした国民文学が出現することを待望してもいた。

実際、昭和一二年（一九三七）上半期の国民文学論ブームが、数年後の第二のピークから振り返られる時どのように語られていたか、本節の最後にそのことを検証しておく。

宮尾誠勝は「国民文学の基礎理論」（『三田文学』一九四〇・一二）において、「国民文学を要望する声は、嘗て数年前にも起つたことがあつた」ことにふれ、「今日〔昭和一五年末〕の如く、国民一般の間から湧き起つた要望ではなく、単に一部の文学者の間に要望された現象に過ぎ」ず、それゆえ「何時の間にか消えて終つた」（七九頁）と捉えている。岡澤秀虎「国民文学」について——国民主義文学と国家主義文学」（『早稲田文学』一九四一・一二）でも、「その時はより多く『民族性』と関連して論ぜられ、結局否定的見解の優勢

裡に一応葬り去られたやうに見えた」（二三二頁）と評され、古谷綱武も「郷土文学こそ国民文学」（『文化日本』一九四一・三）において、その理由を「提唱が具体的な思想内容をもたず、たゞ国民としての新しい自覚にめざめたひとびとの、精神の決意や覚悟の叫びにすぎなかつたゝめ」（五二頁）とみている。いずれも、民族主義的な国民文学論を想起しながら、その論者や思想内容の難ゆえに結実をみなかつたと、国民文学論・第一のピークを捉えていた。もとより論難されたものの、数年後まで強く記憶に残つたのは、当時の多様な国民文学論のうち民族主義的なもののみだつたのだ。それでも、矢崎弾が「国民文学創造の条件（一）」（『国民新聞』一九四〇・一二・三〇）で、「事変前の民族主義文芸の提唱はこのごろの前触れであり、その予報であり、今日の転機をもたらす歯車に油をそゝぐ役割をはたした」（四面）と指摘した通り、昭和一〇年代の国民文学論は、新体制運動を機に、昭和一五年（一九四〇）下半期から、再び表舞台で第二のピークを迎えていく。

III

III-1

昭和一〇年代半ばの国民文学論・第二のピークは、文学（者）による新体制運動への関わり方として論題^{トピック}となつていく。榊山潤は

「国民文学とは何か」(『文芸』一九四〇・一二)において、「最近、国民文学といふことが、やたらに使はれる。すこし軽々しいと思はれるくらい、これは今日の流行語となつてゐる」ことにふれ、「新体制に協力するための、文学者の合言葉といへば、殆んど全部が国民文学」(一四三頁)だとも見ていた。また、渡邊和郎も「国民文学論議と新人に就いて——文芸時評」(『思想と文学』一九四〇・一二)で、「新体制といふ言葉が、一つの流行語となつたと同様に、国民文学といふ言葉が、この頃の文壇の流行語となつた」(五八頁)と指摘していた。さらに、河上徹太郎らによる『文学界』誌上の座談会でも、国民文学論は次のように話題にされる。

林 国民文学といふものは吾々の作品として、狙ふべきものでなくて、頭の中に在つて、それを……。

中島 だから今国民文学を作らうとか作らないといふことよりも、出来て来るのだよ。

林 だから文学者は俺が国民文学を作らうと思つて居れば宜いのだよ。

中島 それが却つてのん気みたいに聞えるな。一体俺達の目の前にはもう少し真剣にならなければならない問題が随分あるのだがネ。国民文学といふ問題もさういふ観点で考へれば誰の頭にもあるのだらうがネ。今の青野さんと林君の議論にし

ても妙な気がするね。

亀井 各々決意を語つて居るわけサ。

舟橋 君(中島)の真面目な国民文学といふのは何だ。

中島 僕は今申上げた通り国民文化にしろ国民文学にしろ、さういふものを作る下地を作る。その方を本気で考へてゐるのだ。今日の座談会の空気は和氣藹々で或は議論も出て仲々宜いけれども、何だかまだ焦点を外れてゐるところが感じられるのだ。

(河上徹太郎・林房雄・舟橋聖一・亀井勝一郎・中村光夫・中山義秀・井伏鱒二・深田久彌・青野季吉・中島健蔵「文学と新体制」(同人座談会)『文学界』一九四〇・一一、九九頁)

ここからは、第一に、「文学と新体制」という論題^{トピック}の中で国民文学が議論され、つまりは政治・国家と文学者との関係が顕在化してきたこと、第二に、相変わらず論者によつて目指すべき国民文学(論)に大きな隔たりがあること、それと関つて第三に、国民文学それ自体よりも、その「下地」をつくろうとする動きがみられ始めること、が確認できる。

ここで時計の針を戻せば、日中戦争開戦後に北支に飛んで現地報告の先鞭をつけた林房雄は「私の新生活体制(二)——国民文学の傑作を」(『読売新聞』一九四〇・八・二二夕)を書き、「真の新体制

のもとに於ては、「国民文学」が一般の問題となるであらうが、その時になつてあわてなために、今から国民文学の傑作を書きためておく」（三面）と、自信に満ちた予言をしていた。同じ陣営では、亀井勝一郎が「英雄詩の創造」（『帝国大学新聞』一九四〇・一一・二五）において、「国民文学とは今日の文学者にとつて一つの覚悟」だと断じては、「国民文学とはまづ第一に民族の英雄を祭る文学」だと持説を繰り返しつつ、「今日までの日本文学史で、最大の国民文学」として「忠臣蔵」をあげ、「これほど普遍的に愛された文学は他にない」（六面）と論陣を張っていた。もちろん、「私は現代の日本の政治家たちの文学へのおせつかい、を拒絶したい」（中谷博「国民主義文学理論の提唱——其の三」『文化組織』一九四〇・一〇、一一頁）という声もあがつたが、転向後のプロレタリア文学者が多く国策文学に向かつたことと連動するように、彼／彼女らが国民文学論も支えていった。他に、新たな国民文学論としては、和田傳が「新興文学の検討（五）——新な性格へ」（『読売新聞』一九四〇・四・一七）であげる「来るべき国民文学」（五面）としての農民文学があるが、これは戦争文学同様、転向文学の変奏^{バリエーション}Ⅱ最新版でもあった。

新体制（言説）がメディアを賑わせたこの時期、実に多くの国民文学論が産出されていったが、その論理構成・主題を検討していくと、ほぼ四つの系統に分類することができる。

①として、民族主義的な国民文学論がある。浅野晃は「国民文学への道——日本文学の新動向としての民族文学・理想主義文学・ロマンチズム文学に就いて」（『新潮』一九四〇・一一）において、「われわれの言ふ国民文学は、国民の再形成のために絶対に必要な国民的Ⅱ臣民的感觉の回復のための戦ひ」で、「この戦ひに於いて、われわれは拠るべき源^マ理を、古典を確立しておかねばならぬ」と断じ、次のように日本文学史を再構築していく。

理想主義文学は、われわれの国では肇国の精神を根元とするから、その古典は、歴史すなはち日本書記であらねばならぬ。ロマンチズム文学は英雄をうたふものであるから、その古典は叙事詩Ⅱ古事記であらねばならぬ。そして抒情詩の古典は万葉であるだらう。かく古典を確定する時、国民文学の伝統は脈々としてわれわれに伝承される。（二二頁）

保田興重郎は「国民文学といふこと」（『文芸』一九四〇・一二）において、「国民文学といふことについては、この数年来浅野晃氏の主として述べてきたところであるが、最近一般にこの声をきくのは、もとより好ましい時代の進歩」（二二九頁）だと判じた上で、「国民文学論の根本は文学者の志と、わが文学の歴史を明らかにすることにある」（二四〇頁）とその目的を明示しながらも、「十九世

紀式小説の思想と構成と形式に疑問をもつ」がゆえに「国民文学の」とつときは、国民的英雄や伝説史話から始めねばならぬ」として、百人一首を見出し、「これだけが日本の家庭に於て、極めて自然に日本人の先祖の美や趣味や感情や考へ方を回想せしめる」(一四一頁)と、裾野の広い国民文学論を展開している。¹⁾

日本の古典文学ならば、風巻景次郎「国民文学と古典(一〇四)」「《中外商業新報》一九四〇・一一・一六(二〇)がある。風巻は「国民文学と古典(二)——古典は今日尚生きてゐる国民文学」(《中外商業新報》一九四〇・一一・一七)で、古典を「現在の眼を以て見通して、その視野の裡にある位置を占め、ある意味を持つて働きかけてくるもの」だと定義し、日本文学の連続性を前提として「古典はすべて国民文学」(六面)だと言表している。

こうした見方を大々的に展開したのが、民族的な伝統を前提とした日本文学史から、時代ごとの国民文学を再発見していく、『新潮』の特集「わが国の国民文学」(一九四〇・一一)である。藤田徳太郎は「上古の国民文学」で、「上古の文学こそは、現代の国民文学の建設に確固たる指針を示す座標となるに違ひない」という評価軸を示した上で、「物語の方面に古事記」、「詩歌の方面に万葉集」があるとして、「両書とも、わが国家の持つ不朽の古典であるとともに、醇乎たる民族精神の光明を永久に輝かせる不滅の聖書」(一一八頁)だと評している。舟橋聖一は「源氏物語と国民文学」で、

「わが民族の優秀性を、世界に向つて誇示しうるやうな大芸術」(二三頁)として源氏物語をあげている。桑原暁一は「民族生活の体験と内心の表現——近古に於ける国民文学に関連せしめて」において、「われわれが国民文学の真実の伝統を求め、当時の民族生活の内心の直接的表現にふるるためには、更にすすんで和歌をよむのほかはない」(二二九頁)と述べる。塩田良平は「江戸時代の国民文学」で、西鶴の浮世草子、馬琴『里見八犬伝』、頼山陽『日本外史』を「それぞれの時代的高峰と見、萌芽的のものから次第に国民精神醸成へと進んで行き、幕末に至つて辺境事あるに及び、茲に日本の意識が高まつて遂に「外史」へと結実した」(二三三頁)とみる。雅川滉は「明治・大正・昭和に於ける国民文学」において、「散文芸術に於ける国民文学的色彩の稀薄は、実に小説形式が歐洲的所産に外ならないことに原因してゐる」と捉え、「明治以後の詩歌に於ける、万葉復興の運動が、散文芸術の歐洲化と反して、韻文芸術の復古化といふ大きな役割を演じてゐる」(一三五頁)のだとして、「現代に於ける国民文学の問題」は、「近代小説の問題としてよりは、まづ詩文学の問題として考へられ、合理主義よりは詩的精神の所産として見られなければならない」(一三七頁)と、日本固有の詩歌を注目していく。

こうしてみると、国文学者の議論は、浅野や保田のそれとは、立場や思想を異にしながらも、日本文学史を前提として、そこから国

民文学に値する作品を選択していくという振る舞いにおいて近似している。もつとも、浅野晃は「国民文学運動私見」(『新潮』

一九四〇・一二)に至ると、「私の言ふ国民文学運動といふのは、文学に於ける第二の尊皇攘夷運動」(三四頁)とまでいうようになり、「文学を通じての国民再形成を目ざす教育運動、それを私は国民文学運動と呼ぶ」(三六頁)と、文学者を教育する立場に据えて、民族主義的な国民文学論の運動としての局面を強調していくようになる。してみれば、国文学者による国民文学論との差異は明らかだが、議論の枠組みと主張内容は共有されていた。

②として、国民文学を直接議論するのではなく、国民の文化水準向上を目指すべきだとする国民文学論がある。岸田國士・河上徹太郎「大いなる構想(対談)」(『文芸』一九四〇・一二)において、「国民文学」といふ概念を、どういふ風に扱ふかといふやうなことは、仕事の上でお考へですか?という河上の問いに、岸田は次のように応じている。

やつぱり文学だけを離さないで、文学と芸術の部門を一緒にして、話合つたらどうかと思ひますね。〔略〕かういふ機会に文学、芸術等を一丸として、国民的なものとはどういふものか?といふことを研究する。しかもそれは押し出してゆくといふより、寧ろみんながモヤくと頭の中でもつてゐるものを並べて、そ

の中から屹度共通な理念が発見できるんじゃないかといふ期待をもつてゐるわけです。(二二頁)

こうして岸田は、国民文学を論じつつも、文学に限らず他の芸術部門との連携を通じて、国民文化を基盤から考えようとしていく。豊島與志雄も、「国民文学」の展望」(『文芸』一九四〇・一二)において、国民文化・文学について次のような比喻を提示している。

記念碑全体の構成を考へることなく、与へられた台石の上に据ゑる像だけを拵へるのでは、決して真の国民文学は出来上らない。碑につける像だけを拵へることは、御用文学の為すべきことであり、または墮落したリアリズムの為すべきことである。真の国民文学は台石をもこめた記念碑全体を考案し製作すべきであり、それには、国家的理想を獲得しなければならない。(二二七頁)

さらに万葉集を例示する豊島は、御用文学を排しつつ、しかし「国家的理想」をもつ文学を志向していく。同様のねじれは、宮尾誠勝が「国民文学の基礎理論」(『三田文学』一九四〇・一二)において、「日本の現実には新しい国民文学の成立を熾烈に要望してゐる」ことにふれつつ、「単に文壇的な問題であるばかりでなく、同

時に芸術文化の一般的な問題」(七八頁)だと論及しており、新体制と国民文学論との関係が次のように示される。

国民文学樹立の要望は施政者の側から文化政策的に強制されたのではなく、時局に眼覚めた国民の間に自然発生的に湧き起つて来たものであり、それに伴つて必然的に文学者自身の中から、及び文学に関心を有する一部の識者の間から起つたものである。それが偶々現在に於ては政策的な要求(大政翼賛会及び内閣情報局の文化統制)と結付いて来てゐると解するのが正当であらう。(八〇～八二頁)

その上で宮尾は、「国民文学の当面の目的の第一は、全国民の文化的水準を向上せしめ、新体制下の日本文化の基礎を樹立すること」で、「現代に於ける小説、詩、戯曲等の有ゆる文学作品は、国民に対して何等か与へるものなくしてはその存在理由を持つべきではない」(八一頁)とまで述べた。これらが、新体制下の国民文化論Ⅱ国民文学論である。

③として、②とプロレタリア文学の立場の延長線上に、読者を積極的に問題化していく国民文学論がある。赤木俊は「国民文学」と読者」(『構想』一九四〇・一一)で、「今日私達が直面してゐる「国民文学」は未だ甚だ漠として実体の明らかならざるもので、そ

の首唱者達に依つて各人各様の解釈を下されてゐるやうな状態」と国民文学論の現状にふれた上で、「国民文学」の死活の鍵を握るものは読者の問題」(八一頁)だとその要諦を示した。また、②の国民文学論と重なるようにして中島健蔵は「基準の再建」(『文芸』一九四〇・一二)において、「国民文学提唱の新しい意義は、現代文学の国民的基準の再建にある」、「国民文学の条件は、万民の心を動かし、万民の意識を富ませ、最も気むづかしい高級な者から、最も素朴な者に到るまでに、何物かを与へること」だという見解を示した上で、「作家を鞭打し、作家を罵る前に、先づ読者の反省が必要」(二五二頁)だと述べ、読者の役割を強調していた。

この時期には、広範な読者という意味での大衆文学や、旧来のプロレタリア文学の立場からの国民文学論はあまりみられず、一国民としての読者Ⅱ書き手による言表も多い。これが④、文学者がその生活を書くことで国民文学とするという国民文学論である。福原麟太郎「国民文学」(『日本読書新聞』一九四〇・一〇・一五)における「文学の本質は必然的に国民文学性にある」、「文学のありやう自身が国民文学」(二二面)、中野好夫「文化政策へ望む 文芸(下)——国民文学の途」(『朝日新聞』一九四〇・一一・一五)による「一国民として、動揺の中から掴み得た国民的理想の感動を醇平たる文学として表現することが真に国民文学の道」(五面)といった言表がそれにあたる。実作者では、榊山潤が「国民文学とは何か」(『文芸』

一九四〇・一二)において、「文学者の政治的協力といふことは、結果として書く以外に何ものもない」、「手さぐりの目標が、とりあへず国民文学」(一四三頁)だという見解を示し、さらに「国民文学とは、われわれの市井生活者の持つてゐる市民感情を、国民感情におきかへて眺めること、われわれ自身が身につけてゐた、小市民性を脱して国民の一員と考へること、そこから始まる」(一四五頁)と、一国民としての自覚を言明している。あるいは、伊藤整は「国民文学といふ考」(『新潮』一九四〇・一二)で国民文学を「今の我々と与へられた最大な命題」と捉え、「極めて緊迫した現在の日本国民の文学と考へることもできるし、ゲエテの文学がドイツ人にとつて持つてゐるやうな広い意味のものと考へることもできる」として、「私などの考へる理想的な状態は、現在の日々の生活に前者のやうな意味で合致しながら、そのままで後者のやうなものとなり得るやうな作品」(二〇六頁)だと言表している。また、伊藤整は「国民の文学」(『新潮』一九四〇・一二)でも、「文学者の日記のやうな形のものとしてでもいいからかういふ時代の生活の相を描いて見たい」(二八頁)と述べて、身近な生活を書くことを国民文学へと結びつけていく。

ここまでの国民文学論・第二のピークに展開された議論の論点をまとめておけば、①民族主義的な国民文学論、②国民の文化水準向上を目指す国民文学論、③読者を問題化していく国民文学論、④文

学者の生活を重視する国民文学論、の四タイプが出揃っていた。

III-2

昭和一六年(一九四一)になつても、特輯「日本国民と文学」のリード「国民と文学の特輯について」(『日本芸芸新聞』一九四一・一・一〇)で、「国民文学論が流行しながらみんな五里霧中で論じあつてゐる」、「これが現代文学の内的な要求によつて叫ばれたのではなく、外部的な政治への協力姿態として恰好だから」(二面)だと揶揄される程度には、国民文学論は盛んであつた。前年のタイプを手がかりに、この年の議論も検討していこう。

①は民族主義的な国民文学論である。福田清人は「国民文学私見」(『文芸情報』一九四一・一)で、「国民文学といふ場合やはり、国民の精神の烈しい燃焼が中核にならなければならぬ」と、国民をその中心に置こうとし、そのゆくえを次のように示している。

我々はこれ「国民文学」を古典に求めてみれば、先づ古事記がある。それは国家創造の著しい意志を示してある。こゝにあるあらゆるものを含み大きな精神は、今日日本が更に大きい日本にもし上らんとする時、我々の精神にうけつがねばならないものだ。次に万葉集がある。これは最も高貴なるお方から下は乞食のやうな身分にいたるまでの歌を集めてあることも御承知の通

りである。民族精神の豊かさを、国家をたゝへる歌から、純愛の悲歌にもみだされる。(一二頁)

もちろん、階級差をこえて、ひろく国民を対象とした議論でありながら、その要諦として民族を根拠とした議論には違いない。浅野晃は「愛国文学と亡国文学」(『日本学芸新聞』一九四一・一・一〇)では、「国民にまで形成するやうな作用を有つ文学は興国文学であるといふことが出来る」(三面)、つづく「愛国文学と亡国文学(承前)」(『日本学芸新聞』一九四一・一・二五)では、「国民文学論はそれ自体危機論」、「帰するところは臣従の悲願の文学」(三面)といった国家存亡と連動したものとして国民文学論を展開していく。また、齋藤清衛は「国民文学史の問題」(『文芸文化』一九四一・一)で「新二千六百年史が、現代の同胞に強力な示唆であつたやうに、世界文学史に連なるべき国民文学形成の跡を語り、それが将来日本文学の進むべき方向の暗示となるさうしたものを欲しい」(二五頁)と言表していた。

②・③・④のタイプは、この年には合流して展開されることが多い。また、山室静「文芸時評 国民文学論への希望」(『政界往来』一九四一・一)には、「文学は健全な心の糧として、単に少数者を自慰的に喜ばすのではなく、大多数の国民を力づけ、慰まし励ますものである必要がある」とした上で、浅野晃(タイプ)の発言を警

戒して「それ〔国民文学論〕を狭い意味での国家主義的方向に求めるのは、却つて国民の包摂性を狭め、無用の摩擦を多くして、広い発展性を妨げるしかない」(三一頁)といった言明もみられる。

国民文学論について「各論者が思ひ思ひのことを主張してゐて、国民文学の基準となるものは未だ決定づけられてゐない」と判じる「作家と国民 新しい文学の基準」(『中央公論』一九四一・一)の高冲陽造は、「新文学の性質」は「偉大な国民的情熱や目的に結びついた人間的感動の創造にかかはるもの」(三〇頁)だとして、次のように論じている。

国民文学においては、作家は一面教育者とならねばならないだらう。彼は国民的現実のうちに沈潜し、国民の健全な生活から、その精神や感情から学ぶと同時に、それを言葉の美的表現によつて、一層普遍的な高いものとしてやり、国民の無意識的なものをさへ意識的なものとし、彼らの感情を浄化してやる、かくて国民の声は、作家の声となり、作家の魂は国民の魂となる。(三八頁)

ここで文学者は、国民に対する教育者であると同時に、その生活の媒介者とも位置づけられている。これを変奏すれば、赤木俊「国民文学の課題」(『日本学芸新聞』一九四一・一・一〇)が示す、「国

民と文学は今日深い溝に依つて分たれて居り、いかにしてその溝を埋めんとするかに国民文学の最も大きい課題がある」とと国民間の階級差を問題化する国民文学論となる。すでに読者を問題化していた赤木は、「広汎な読者層の成立は国民生活水準の上昇を要求する」、

「国民といふのは形式的なものではなく、確立された人間に依る協同の社会を建設することを理想とする人々を指す」（二面）と、国民文化水準の向上を期しつつ、プロレタリア文学の立場からの国民文学論へも近接していく。政治的な立場を示したのは、岡澤秀虎「国民文学」について——国民主義文学と国家主義文学」（『早稲田文学』一九四一・二）である。同論で岡澤は、「今日、所謂『昭和維新』の新体制を樹立しようとする革新的機運が確立されるとそれに呼応するが如く、この術語が漠然たる雰囲気を持った合言葉として浮び上つて来た」（一三二―一三三頁）と指摘する。さらに、「近代民族国家の成立が生み出した文化を、『国民文化』と名付け、その一翼たる文芸を『国民文学』と呼んだ」のだとする岡澤は、「重要なことは、文学史上のこの『国民文学』は、その実質に於て、近代市民の文芸」（一三六頁）であることを確認しながら、「大政翼賛運動に伴ふ新文芸は、国家主義文芸」（一四〇頁）と呼ぶべきだと論じて、同時代の国民文学論を批判する。

④に近いのは、石川達三の発言である。石川は「新文学の出発（上）——批評家になりすぎた作家」（『東京日日新聞』一九四一・一・

二四）で「私は国民文学の樹立といふ言葉をまだ一度も口にしたことはない」と述べ、「作家は新体制について何も語る必要はない」、「立派な作品を産むことが即ち彼の抱負であり理論」（三面）だという立場を示した。つづく「新文学の出発（下）——作家は情熱を失つてゐる」（『東京日日新聞』一九四一・一・二五）で石川は、「国民文学の提唱を、ただ単純に、良き文学への待望といふ程度に軽く考へておきたい」と述べ、「国民文学は提唱されても作家はみな情熱を失つてゐるやうに見える」現状を「一番いけない」と判じ、「統制だの、検閲だの必要以上に作家を脅かしてゐては、新しい文学は決して出て来ない」（三面）と、創作環境の保持を主張していた。

くわえてタイプ⑤として、国民文学の内実をジャンルから議論していく国民文学論がある。大衆小説家の村雨退二郎は「文芸中央会と国民文学」（『文芸情報』一九四一・一）で、「私は国民文学を、純文学単独の問題でなく、大衆文学の新形態でもなく、文学一元化と分離できない問題と信じて居り、また浪漫主義の復興では絶対になく、『国民主義の文学』であり、同時に『新理想主義文学』と呼ぶことを主張してゐる」（一五頁）と言明していた。また、推理小説家の木々高太郎も「文化時評（4）——文芸中央会最初の問題」（『東京日日新聞』一九四一・二・一）で、「国民文学といふ称呼のよく理解されないのは、日本に未だに国民文学の称呼に値する文学が生れず、純文学は私小説のうちに、大衆文学は娯楽と媚俗のうちに過

「ごされて来たから」ではないかと疑問を呈し、「今やしかし、従来の文学より湧き出でて、純文学にして大衆文学である筈の、新しい国民文学を待望し、これを迎へ、促すことが急務」（三面）だと、村雨同様の主張を展開している。両者とも純文学作家ではなく、また、多様なジャンルの文学団体の統合組織である日本文芸中央会に関わった人物である。それゆえ、ジャンル横断的な新しい文学を目指していたのだ。

この後、「国民文学の樹立へ」という総題のもと、『読売新聞』紙上で一四回にわたって、国民文学（論）をめぐる、多様な立場の文学者の見解が表明されていく。ここまでに整理した①～⑤のタイプを手がかりに、それぞれの要所を検討していこう。

本多顯彰は「国民文学の樹立へ【1】——何が真の文学か」（一九四一・二・二七夕）において、「国民文学の基礎が国民生活でなければならぬといふことには何人も異論はあるまい」とした上で、純文学作家、大衆作家いずれもがそれに該当しないと判じ、「それ〔国民文学〕は澎湃として盛り上る国民生活の表現の一つとしておのづから生れるやうなものでなければならぬ」（三面）と述べる（②・④）。亀井勝一郎は「国民文学の樹立へ【2】——民族の犠牲者」（一九四一・二・二八夕）で、「わが文学史上、これこそ国民文学だといへる代表作」として『万葉集』、『平家物語』、『忠臣蔵』をあげ、「いづれをとつても、その時代の民族の、最も心奥を

流れた感情に根ざしてゐる」（三面）ことを指摘した（①）。浅野晃は「国民文学の樹立へ【3】——「確信と歴史」（一九四一・三・一夕）で、「われらの仕事は過去の偉大な国民文学の伝統あるひは血統を身を以て護符することにあると信ずる」（三面）と持説を繰り返す（①）。また、林房雄は「国民文学の樹立へ【5】——神聖なる国民」（一九四一・三・六夕）で、「日本人は今東亜の生死を賭して国民として更生せんとしつゝある」ことを強調し、「己れに押し、人に押し、文学の顔にも押す「非国民」の烙印が必要なのだ」（三面）と言表しており（①）、いずれも民族主義的な国民文学論である。丹羽文雄は「国民文学の樹立へ【4】——平作者の努力」（一九四一・三・五夕）で、「国民文学は今日や明日から新しく始まるものではなく、私たちは意識的無意識的にかゝらず、国民文学に従事してきてゐる」（三面）と述べ（④）、榊山潤も「国民文学の樹立へ【8】——熱意の表現」（一九四一・三・九夕）で、「国民的自覚の新鮮と、方向へのゆるみなき協力が、国民文学の出發」だとし、て、「国民文学は、今日の大いなる熱意の表現でなければならぬ」（三面）と述べており（④）、文学者自身の生活・自覚への反省が国民文学（論）へと接続されている。間宮茂輔は「国民文学の樹立へ【6】——根本からの考察」（一九四一・三・七夕）において、「国民文学」にとつての大きな不幸は、それが新体制の呼声に応じて誰か唱へるともなく唱へられ始めた、といふ点にある」（三面）と指摘

している。つづく「国民文学の樹立へ」【7】——まことの文学」(一九四一・三・八夕)で間宮は、「多くの国民に親しまれ愛され、時には良き慰みを、時には激励を注入するやうな文学を創ると同時に、国民の想意を擲み、国民の要求を取上げた文学を創らねばならない」(三面)と、幅広い国民読者層へ訴えかける国民のための創作を目指す(③)。あるいは、打木村治「国民文学の樹立へ」【9】——協同勤労の精神」(一九四一・三・一一夕)のように、「農民文学」(三面)など、すでに他のレッテルを貼られた文学を国民文学だと称す議論もみられた(後述する新たなタイプ⑥)。舟橋聖一は「国民文学の樹立へ」【10】——生命的流れ」(一九四一・三・一三夕)において、「日本国民にとつて、光榮となり、誇りとなり、且つ十分な愛敬をうけるやうな文学作品を以て、はじめて国民文学と称しうる」のだとして、「日本に於て、古くより伝へられ、遺されて来た古典文学作品は、殆ど悉くといつてもいい程、文学的に優秀な作品」(三面)だと評した。つづく「国民文学の樹立へ」【11】——節操を持せよ」(一九四一・三・一四夕)において舟橋は、「現代に於ける国民文学の樹立とは、現代の古典を完成することであるから、作家の覚悟の程も、並大抵のことであつてはならぬ」(三面)と、古典に連なる作品を国民文学と考えていた(①・④)。貴司山治は「国民文学の樹立へ」【12】——作家の課題」(一九四一・三・一五夕)で、「その民族の伝統精神と、国家生活が強調されてゐるものを国民文

学だと思つてゐる」と述べ、「それには純文学とか大衆文学とか、歴史文学とか現代文学とかの区別はあえて問はなくてもいい」(三面)と些末なジャンルの種差よりも、民族・生活に即したエッセンスを強調していた(①・④・⑤)。海音寺潮五郎は「国民文学の樹立へ」【13】——思想の建設を」(一九四一・三・一六夕)において、「国民文学の必須の条件」として「多数の読者を持ち得、そしてその国民への精神的感化力が大であること」をあげ、「日本の古典中から、平家物語、八犬伝、日本外史の三つ」(三面)を例示している(①・②・③)。先駆的な国民文学論者でもある高倉テルは、「国民文学の樹立へ」【完】——内容と形式」(一九四一・三・一八夕)で、「国民」ぜんたいの大きな義理人情(倫理)をひろびろと取り上げ、新らしくそれを国民に自覺させ、国民に力ずよい民族的自信と方向を持たせる所まで行つて、初めて文学は現代にふさわしい高い文学となる事が出来る」(三面)と言表し、改めて国民文学を定義している(①・②・③・④)。

してみると、このシリーズ記事における国民文学論を通覧して明らかなのは、大半がこれまでに議論されてきた論点の反復であることと、民族主義的な観点がほとんどの国民文学論に、それとして目立つことなく、逆にいえばごく自然な要素として多く浸潤してきたことである。江馬修「国民文学とは何ぞや(下)」——農民生活の中に」(『信濃毎日新聞』一九四一・三・七)に至つては、国民文学を

「一言で国策文学、もしくは大政翼賛文学とも呼ばれるべきもので、日本民族の本質と特性を描くと共に、新東亜建設といふ大きな政治的目標に読者を総動員するに役立たしめるやうな文学の事」(三面)だと言明するほどである。だから、大勢としては小口優が「国民文学」(『早稲田文学』一九四一・三)で指摘する通り、「国民文学の必要は異口同音に力説されてゐるが、国民文学が如何なるものであるか、或は如何なるものであるべきかといふことについては論者によつてその見解主張に著しい相違が見られるといふこと、否、大抵の人はこの言葉の曖昧なのを利用して、これに各自勝手の意味を持たせて或は全く何の意味も持たせずに使つてゐる」(七五頁)のだ。こうして、盛んに産出されていく国民文学論言説が国民文学の概念を再編成していくと同時に、個々の言表においては、当時の書き手たちの目に映じた、文学の諸問題が論じられることにもなった。

ここまでにあげた国民文学論のタイプ①②③④⑤⑥の他にも、この時期には新たな見解が示された。まず、先に挙げた新たなタイプ⑥の補足をしておく。多様なレッテル文学の「総合」(五面)を国民文学に求める土屋光司「国民文学への期待」(『日本学芸新聞』一九四一・五・一〇)、「真の郷土文学であることが、国民文学の母胎であり、国民文学のリアリティは、それが郷土文学であることのなかにある」(五三頁)と主張する古谷綱武「郷土文学こそ国民文学」(『文化日本』一九四一・三)、^{トビウタ}論題通り農民文学、大陸開拓文学

を掲げる、岩倉政治「農民文学と国民文学」(加藤武雄ほか『国民文学の構想』聖紀書房、一九四二)、福田清人「国民文学としての大陸開拓文学」(同前)などがある。このことに關して、田中幾太郎は「国民文学の軌跡」(『日本学芸新聞』一九四一・五・一〇)において、「要はたゞジャーナリズムが、一つの時代の流行冠詞として余り『国民文学』なる文学を濫用しないこと、作者自身も、ただ漠然と無暗に『国民文学』などの銘を符さないことが肝要」(五面)だと言表していた。逆にいえば、国民文学という用語に様々なジャンルを代入する⑥のタイプは、国民文学論が継続されてきてもなお、その内実が不分明であるがゆえに可能な議論となつてゐるのだ。

他に、政治主導による国民文学論として、新体制運動後、日本文芸中央会も「国民文芸の樹立とは、国家の直面せる歴史的現実の中に国民生活の真実を摺み取り、民族発展の歴史的必然の過程と一致して国民の精神を振興させ、国家をして、当面には東亜共榮圈に於て、窮極には世界に於て、最高の文化国家たらしむるために、文芸の側から翼賛するといふことであらう」(『日本文芸中央会の使命』『日本学芸新聞』一九四一・三・一〇、四面)という指針のもとで国民文学の実作を目指していた。また、日本文学の古典が再評価されていく中、近藤忠義は「国文学と国民文学 文壇人と国文学者の握手が急務」(『帝国大学新聞』一九四一・三・二六)で、「文壇人と国文学者」とが、在来の無縁状態を一擲して、双方の武器を貸与し合ふこ

との出来るやうなあらゆる機会をつくり出すやう協力しなくてはならぬ」(八面)と、実作者と国文学者の連携を呼びかけてもいた。

III-3

ここで、昭和一〇年代の国民文学論・第二のピークを迎えて一年後、メタ国民文学論からも検討を進めたい。先行研究にあたる小松伸六「戦争文学の展望」では、「戦争文学の第二期に入つた昭和十五・六年頃の「国民文学」要望の声は、折角戦場文学にあきたらぬ反省としても云われたものであつたが、作品としては何一つ結実せず「西郷隆盛」(林房雄)とか「楠正成」(浅野晃)のような「自我」の意識の一ぺんすら感じさせぬ神秘的な自称歴史小説が国民文学の代用品として登場した」と批判的に論及されている¹²⁾。

同時代に戻れば、第一に、板垣直子『事変下の文学』(第一書房、一九四二)がある。板垣は、「四〇年の秋になつて国民文学の議論に就いての特輯が、かなり多く現はれた」ことに論及しているが、それを「或るジャーナリズムが、こんどは「国民文学」といふ名前を考へついた」、「そしてそれが方々へうつつていった」(三九〇頁)という言説上の出来事とみており、国民文学については「文学本来の文化的使命を一層強めたる質的に向上した作品を作ること」だと「解釈」し、しかもそれが「作家といふものの国策に参与する最も有効にして特有の道」(三九一頁)だと捉えていた。第二に、無署

名「新潮評論 国民文学について」(『新潮』一九四一・五)でも、「ジャーナリズムの上では、国民文学論が盛んに行はれてゐる」という現状把握が示された上で、「新聞の学芸欄、文学専門雑誌、その他文学に関係のあるジャーナリズムの上で、何か彼が国民文学について論じ、どういふ意味でか国民文学の問題に触れてをらぬものはない」(五頁)といった言説状況自体が重視されると同時に、国民文学論の内実が「やつぱり各人各説で、てんでんばらばらに過ぎない」、「国民文学として挙げられる作品の数が多くなればなるほど、形式からいつても、内容から言つても、余りに多様性に富むがために、国民文学といふ特殊な性格が相殺され合つて、却つて曖昧な、掴まへにくいものになつてしまふ」(七頁)のだと、言説状況が国民文学論を霧散させていく様相が捉えられていた。第三に、江馬修は「文学と国民性」(『日本学芸新聞』一九四一・六・一〇)で、やはり「最近数年間、国民文学の呼び声が高い」、「文学と国民性と云ふやうな問題であちこちで論議されてゐる」ことにふれ、「今頃どんな理由で今さららしく国民文学が提唱されたり、文学と国民性の問題が論じられたりしなければならないのか」という問いを立て、「大きな原因の一つ」として「一時ヤング・ゼネレーションを風靡してゐた国際主義的な思潮が、人々から多くの国民性を喪失せしめ、文学に於いても非国民的な傾向が多くなつたと見られた事」(二面)をあげている。同様に、加藤武雄も「国民文学小論」(加藤武雄は

か『国民文学の構想』聖紀書房、一九四二）で、「古典と絶縁し、歴史を忘却し、唯、ひたすらに欧米のそれに追従したのが、明治以降の新文学」だと捉えた上で、「こゝに於て、日本精神を基調とした新文化の樹立が要求され、同時に、国民文学の建設が提唱されるに至つたのは、当然過ぎるほど当然の事だ」（二五九～二六〇頁）と国民文学論隆盛の要因を指摘し、国民文学は「外来思想の影響の下に久しく忘れてゐた我等の伝統を回顧する事からはじまる」（二八〇頁）のだと言表していた。第四として、小田切秀雄は「国民文学論への省察」（『日本文芸』一九四一・七）において、次のように述べていた。

近代日本の文学が国民のうちから孤立して永く自己封鎖的ないとなみをつづけて来たことへの反省は、すでに数年前繰り返し論議された文学大衆化の問題のなかに強く意識されてゐたのであつたが、その後も横光利一の「純粹小説論」の提唱のなかに同じ反省が全く別の方向に於いて意識されて以来、文学を国民万人のものとするための努力は現代文学の根本的な課題の一つとして残つてゐたのであつた。

このように小田切は、国民文学論の来歴を文学（者）と国民（読者）の乖離から捉えつつ、「それが最近に至つて国民文学の要望と

いふ形であらためて問題となつて来た」（六頁）のだと、一連の動向を整理する。同様の乖離については、古谷綱武も「国民文学の童話性」（『新潮』一九四一・五）で、「国民文学への要望」のなかに「小説家と小説の、一般社会からの遊離を埋めようとする願ひ、埋めねばならないと考へる考へ」（八六頁）を見出してゐた。

こうした時期に、浅野晃は評論集『国民文学論』（高山書院、一九四二）を上梓し、その「跋」に「これを特に国民文学論と題したのは、今日国民文学といふ言葉があまりに濫用されてゐるのが嘆かしいから」（二八一頁）だという一節を書きつける。昭和一〇年代を通じて、民族主義的な国民文学論を主張してきた浅野は、旧来の議論を政局の追い風を受けて再文脈化しながら、^{トレッツ}論題として国民文学論を再提示していく。こうした動向に即して、中河與一は「新しい国民文学の性格」（『雄弁』一九四一・九）で、次のように述べている。

国民文学といふものは、唯国策に沿つて居るからよいか、或は現在の時勢に合つて居るから結構だとかいつただけのものでなく、本当に民族精神、国民精神を昂めるものならば、必ずしも国策の事を書いてなくとも、真の意味の国民文学であると思ふのです。（三七頁）

また、吹田順助は「国民文学発生の必然性——止揚されて到達する全体化の傾向」（『帝国大学新聞』一九四一・一〇・二〇）において、「今後の日本の国民文学はその基調において日本精神、民族意識、協同体的感情を持ったものでなければならない」という指針を示し、「日本の文学者は従来の個人主義的・小我的立場から脱却して、新しい精神的立脚地に立たねばならない」（八面）と、国民文学の書き手たる文学者の変化を促している。いずれも、当時の状況を正しく、ふまえ、国策や政治を突き抜けた適切な精神こそが国民文学の要件だとされていく。

また、国民文学としての戦争文学も注目を集めていく。佐藤観次郎は「真実の強さ」（『早稲田文学』一九四一・九）で、まず、「今日、国民文学といふものが、世上に何にかと問題になつてゐるが、私はこの史上空前の大事変に際会した日本国民の中から、特に戦争の絶対面に際会して、自分の生命を曝した体験者が、一国民としての強き表現力をもつて、新しい国民文学の形を示め^マて貰ひたいし、その文学の生れることを望みたい一人」（二五頁）だという立場を明示し、次のようにして具体的な戦争文学をあげつつ、それらの共通点も指摘していく。

独り火野氏の作品〔火野葦平『土と兵隊』〕のみならず、上田廣氏の『黄塵』にしても、日比野士朗氏の『呉淞クリーク』にし

ても、棟田博氏の『分隊長の手記』にしても、里村欣三氏の『徐州戦』にしても、皆戦争の現実につかつて、その生々しい体験を実際によく描破したものである。〔略〕それ〔表現の強さ〕は、作者が、抜きさしならぬ境地から、真面目なものを抉り出してゐるからであると見る。（二六頁）

他にも、中務保二が「戦争文学私見」（『早稲田文学』一九四一・九）で、「国民の共通心理の上に立つて文学作品が生れるならば、これを新しい意味の戦争文学と言へる」として、「国民が国をあげて闘ふ戦争目的完遂するために生きぬく国民生活を描いた文学」を「戦争文学」＝「国民文学」（三七頁）だと捉えている。また、河本敦夫も、「芸術の公共性と国民文学」（『京都帝国大学新聞』一九四一・一一・五）で、「真の文芸は国民共同体の体験を美的に形象化するものであり、本来国民的であることを本質としてゐる」（四面）と言表している。「呉淞クリーク」の著者である日比野士朗も、「戦争と日本文学」（加藤武雄ほか『国民文学の構想』聖紀書房、一九四二）において、「戦争そのものが、国民全部の最も身近に関心の的であつたこと」（二四五頁）に注意を喚起した上で、「戦争文学が直接に民衆の支持を得た」理由として、「作者自身が、一兵士として、崇高な戦争の理念に鍛へられ、しかも一身を鴻毛の軽きに置いたといふ、激しい戦場の条件を備へてゐた」（二四五～二四六頁）ことをあげ、

「戦争文学といふものは新しい国民文学として、文壇のなかにぬつと姿を現して来た」（一四九頁）と振り返っている。このようにして、タイプ⑥の最新版として戦争文学もまた国民文学論という文脈の中へととりこまれていった。

そうした戦争文学の書き手である上田廣は、「ひとつの問題」『早稲田文学』一九四一・九）で「ひとところ、国民文学論が盛んであつた」ことにふれ、「然しまだ、各人各説で、帰するところを知らない感じ」だと感触を述べつつ、「そのうちに、ジャーナリズムにも倦きられ、今に消えてしまいうさな気もする」（三二頁）と、言説のゆくえを予示していた。

実際、上田の発言に前後して、国民文学論の失速が語られていく。無署名「文壇余録」『新潮』一九四一・一〇）においては、「国民文学に対する論議が、盛んに行はれたのは、たしか去年の秋ごろから以後のことだつた」、「そして今年の三四月のころまでは、相当の関心と熱意とがあるらしく、誰も彼も国民文学に対して一応の意見を試みた」（二二頁）と国民文学論の隆盛を振り返つた上で、「一時の流行として、誰も彼も「国民文学々々々々」であつたものが、今ではけろりと忘れ果ててしまつてゐる」ことに「慨嘆」（二三頁）している。また、浅見淵「昭和十六年の創作界」（『若草』一九四一・一二）においても、「昭和十六年の創作界を顧みて、先づ浮ぶのは、去年からしきりに国民文学要望の声が盛んでその論議も相当活発に行はれ

たのにも拘らず、国民文学はもちろんそれに近い作品も現はれなかつたといふこと」（一一頁）が指摘されている。いずれも、短期間における国民文学論の隆盛と、それにもかかわらず実りがなかつたことが批判的に回顧されている。その後の文学場では、「国民文学よりも歴史文学の方が、いつのまにか盛んになつた」（板垣直子「文芸時評 歴史小説の進むべき方向」『新文化』一九四二・七、三二頁）のだ。

ただし、昭和一〇年代における国民文学論言説の歴史的な特質とは、何かしらの実作や国民文学論の定義などとは別にあつた。多様な立場から国民や文学をモチーフとしてさまざまな言表が産出されつつ、そうした国民文学論がインターフェイス（＝装置）となつて、この時期の諸問題が言表されていく側面にこそ、国民文学論の意義をみるべきなのだ。

本節のまとめをかねて、ここで国民文学論が浮上させた諸問題を改めて振り返つてみよう。まずは、その手がかりとして、国民文学論・第二のピーク後に発表されたメタ言説として、村雨退二郎「日本小説文学の原理」（加藤武雄ほか『国民文学の構想』聖紀書房、一九四二）を参照しておく。村雨は、「国民文学の声が高くなつたのは、日本がひそかに米英との決戦を決意し、長期戦体制に突入した頃であつた」、「対米英宣戦布告の一年前、昭和十五年の秋から冬にかけて、国民文学は文壇の日程に登り、ジャーナリズムはこれを

日本文学の画期的トピックとして採上げた」と、ブームを振り返りながら次のように問題化していく。

この問題〔国民文学論〕の提起された時機の善悪を私は知らない。あるひは、かういふ時機でなければ採上げないほど、日本の文学者の西洋心酔は徹底してゐたのかも知れない。その意味では、むしろ絶好の時機を捉へたと解されないこともないが、一面、国民文学の誤解、曲解は、この時機の特殊であることに關係してゐるので、時機を誤つたのではないかとも思はれる。

とにかく、政治的社会的圧力によつて捲起された文壇新体制、文学者の国策協力といふことが、同時に起つた国民文学運動と、機械的に結びつけられたことは、国民文学の進展に予想外の大きな障害となつたことを認めないわけにはいかない。(一八三頁)

ここには、昭和一〇年代における国民文学論の特徴の一面が集約されている。もとより、国民文学論は文学場における文学(者)の問題ではあるが、この論題はそもそも、国内外の政治動向に直接的に触発されたものでもあつた。それが、具体的なかたちをとると、新体制運動(大政翼賛会)や日本文芸中央会の指導をうけることともなり、ここに文化統制や各種文学団体との関わりも生じ、ひろく

国民文化が論じられもした。他にも、民族主義やナショナリズム、ファシズムが論じられ、それに対峙する警戒論も展開される中、日本文学史上における古典作品の再評価が進み、韻文(詩や短歌)への注目も進んだ。伝統的な韻文に対し、散文が西洋由来のジャンルであることも再認識され、西洋(文化)／東洋(文化)の二項対立は、やがて大東亜共栄圏という思想へと至る。文学場では、レツテル文学・国策文学が議論されるうちに、戦場を体験した兵士による戦争文学が圧倒的な説得力・影響力を誇るようになった。もちろん、こうした文学場の変化に伴いながら、文学者たちは、昭和一〇年代の歴史の渦中で文学とは何か、文学者としての存在意義(何を書くか、いかに生きるか)とは何かが問われていく中、国民という概念Ⅱ用語の意味内容も変容を遂げ、書き手たる文学者とその読み手である国民の関係性も、アジア・太平洋戦争の遂行に向けて再編成されていった。

昭和一〇年代の国民文学論は、ブームに限れば昭和一六年(一九四一)に収束する。ただし、国民文学論が文学場のインターフェイスでもあつた以上、その機能は以後もつづいていく。

IV

本稿の課題は、前節までに一応の検討を終えた。というのも、ア

ジア・太平洋戦争開戦以後に語られる国民文学論は、従来から二つの意味で質的な変化を遂げているからだ。第一に、言表内容の大半は従来の国民文学論の反復であり、第二に、時局・戦局の推移に伴い、文学論がすべからず国家や国民を主題とする状況となっており、ことさらに国民文学論を主張する意義がうすれてしまったこと、つまりは昭和一〇年代に議論されてきた国民文学論の総体が、文学場における前提条件と化していくのが昭和一〇年代末の状況なのだ。

こうした歴史の推移は、太平洋戦争開戦によって可視化される。本多顕彰は「新文学の基礎——地道な思考」(『日本評論』一九四二・三)で、「我我独特の忠君愛国の真情」、「我々独特の親子の情愛」、「我々日本人に独特の死生観」を例示し、「そのやうな共通の人間の真実の上にのみ、国民が共有しうる文学が築かれ」、「それが国民文学」なのだと定義する。ここで本多が、国民文学の「要件」である「共通の環境と共通の歴史」(一八七頁)をいかに想定していたかは、「大東亜文学の展望の際に、真先きに国民文学の樹立を主張」し、「次に残る問題は、この国民文学を、どうして大東亜十億の国民の共有物にまで拡大するか」(一八八頁)だという発言に明らかである。こうした国民文学の捉え方は、次の高見順「大東亜共栄圏と国民文学」(『読売新聞』一九四三・四・九)にもみとれる。

私は現地「ビルマ」で、向ふの作家から、代表的な日本の現代文学を翻訳して一般民衆の要望にこたへたいから、その作品をしらせてくれと幾度言はれたことか。そのつど私は選択に迷った。これは是非公的に定めておかねばならぬ。同時に公的に定めらるべき作品を書かねばならぬ。かゝる公的な作品たるべき国民文学を、文学者がこぞつて作り出さねばならぬ。真の国民文学とはかゝるものではなくてはならぬ。(四面)

太平洋戦争開戦前夜の南方徴用によってビルマに行った高見順が、「向ふの作家」から問われる国民文学とは、民族主義的な観点はもちろん、諸外国との比較を前提とした日本文学でもある。しかも、それがこれと決まっていないという状況も含めて、昭和一〇年代の国民文学論(の論点)を継承していることは明らかである。それでいて、いずれの意識も、これまでの国民文学論とは明らかに異なっており、何より右にいう国民文学とは、大東亜共栄圏の盟主国として範たることまでが求められたものなのである。¹⁴⁾

もう一本、昭和一〇年代の代表的な国民文学論として言及される機会の多い、岩上順一「国民文学論」(佐藤春夫・宇野浩二編『近代日本文学研究 昭和文学作家論 下巻』小学館、一九四三)も参照しておく。この年に治安維持法違反で逮捕されることになる岩上だが、ここでは「ただひとり、昭和文学に於て最も高い芸術的な水準をた

もちながら、国民文学と呼ばれるに値する作品を形成し得たのは島崎藤村、「昭和の初頭をかざる『夜明け前』は、ある意味では国民文学の夜明けを告げ知らせるものだった」と、藤村『夜明け前』を特権的に賞賛し、その理由を「ここではじめて、今日の国民がいかに形成されて来たかの歴史的な理由が、緊密な芸術的調和をもつ形象を通じて語られてゐる」（二〇九頁）ことにみていた。つまりは、国民国家における国民形成史として、しかもそれが高い芸術性を備えていることによって、『夜明け前』は岩上にとって理想の国民文学となつてゐるのだ。さらに岩上は、アジア・太平洋戦争自体は肯定しながらも、そこに国民・生活・文学の「再編成」といったマルクス主義的な問題意識をもぐりこませては、次のように国民文学論を展開していく。

満洲事変につづく日支事変、大東亜戦争、ヨーロッパに於ける戦争等々の勃発による第二世界大戦が、否応なしに国民全体を戦争に直面せしめた。国民の生と死とが、容赦ない現実として問はれるにいたつた。国民生活そのものが、この世界的な戦争に直面してあたらしく再編成されねばならなくなつた。国民としての自己が根柢から凝視し変革されねばならなくなつたのである。かくして文学も、あたらしい眼をひらいて、国民とは何ぞやとの問ひに答へねばならなくなつたのである。国民文学

建設の声は、ここからまづ発せられねばならなかつた訳だ。
（二一〇頁）

先の高見論同様、ここでも旧来の論点を継承しつつ、明らかに太平洋戦争開戦以後の国民文学論が展開されている。その要所は、世界的な戦争を戦う日本国民としての文学、ということに尽きる。あるいは、金子謙一は「文学維新論——影山正治・淺野晃・保田與重郎論」（『公論』一九四二・二）において、国民文学を次のように論じていた。

国民文学は、真の国民政治の原動力をなすものだ。文学者は、此の強い自信を持て、猫の目の様に変る瑣々たる政治現象に使役されて、片々たる御用文学、便乗文学の濫造に満足してはならない。文学は最も純粋なものである。最も純粋に、歴史と民族とに奉仕するものである。（二五五頁）

ここで金子は、「政治現象」や「御用文学」を排しながら、しかし国民に直接働きかける「純粋」な文学を通じて、文学者は「歴史と民族」に寄与しうるのでと論じている。それゆえ金子は、「真摯な大衆文学者たち、殊に吉川英治氏の業績は、深く顧られていゝ」（二五五頁）と、民族主義的な国民文学論をジャンル論へと架橋し

ようとしてもいたのだ。

ここまで本節でとりあげた国民文学論は、論点はいずれも従来の国民文学論の反復だが、論者の政治的立場をこえて、かつて民族主義的な国民文学論と目されていたものへと一元化している。その際、かつては階級や政治的立場の分裂が議論されていた国民という概念Ⅱ用語もまた、アジア・太平洋戦争を戦う国民国家の一員へと一元化されている。しかも、この時期の国民文学論には「純粹」という修辭が象徴するように、すでに民族主義や大東亜共栄圏といったイデオロギーまでが透明化された前提条件として定着している。

昭和一〇年代末における国民文学論最後のメルクマール「特輯国民文学の大道」(『文学界』一九四四・二)は、無署名「編輯後記」において、次のように意味づけられていた。

国民文学出でよの声は久しい。勿論、われわれは、こゝで性急且つ形式的に「国民文学」の何であるかを定義づけようとは思はない。しかし、いま大東亜の各地域に、ヨーロッパの末期文化を全く克服した、醇乎として醇なるアジア文化の精華を産み出さうといふとき、その指導的立場にある日本文学の現状に遺憾なものはないであらうか。大東亜文学を含めて、新しい国民文学の方向はいかにあるべきであらうか。「国民文学の大道」を特輯した所以である。(一二二頁)

ここにおいて国民文学論とは、大東亜文学／日本文学を重ねた「新しい国民文学」の謂いであり、すでに昭和一〇年代に議論されてきたそれとは、大きく性質を異にしている。そうした特徴は、次に引く、神保光太郎「大東亜文学序論」にもよくあらわれている。

大東亜文学の樹立とは、「略」各民族が、その民族の伝統を自覚し、その固有性を發揮創造して行くところに達成されるものと思ふ。この意味で、現在の日本文学の、国民文学への意欲と推進、皇道文学の自覚と宣揚と決意とはそのまま、大東亜各国の今後の文学活動に対して先進の典範を顯示してゐるといへるであらう。そして、更に、この皇道文学、或は国民文学の興隆には、われわれの前代に対する反省として、明治以降、ヨーロッパ文学の影響下に、久しく切斷されたかにさへ見えたふるさと大東亜、祖国日本への帰還と覚醒との意味が含まれてゐると思ふ。(六頁)

タイトルにも掲げられたように、ここでは国民文学Ⅱ日本文学の正しい呼称が「大東亜文学」とされ、ヨーロッパ文学の影響を排しつつ、「ふるさと」Ⅱ「大東亜」Ⅱ「祖国日本」への回帰が謳われている。これは一般的な文学論というよりは、文学論のかたちを

とつた大東亜共栄圏の覇権を目指すイデオロギーそれ自体である。

丹羽文雄は「私の国民文学」において、「私の考へる今日の国民文学は、戦ひに勝つための文学である」、「よい作品であるよりも先に役に立つか立たないかで篩にかけるべきである」（一三頁）と言明して、率先して芸術性を放棄し、戦争への貢献のみを国民文学の基準としていた。また、麻生種衛も「二つの可能性」において、「今日のやうな時代に於ては、日本民族の驚天動地の活動の事実を報道することに作家達の誇りと榮譽とがあり、それが国民文学の一つの大きな方向でなければならない」（一五頁）と、やはり芸術性とは異なる局面——戦争に直接貢献しうる報道こそが国民文学なのだと言表していた。あるいは、平田次三郎は「国民文学の趨勢」において、「国民の倫理的地盤が在来のヨーロッパ諸国家の基礎に連がるが如きものであるなら、私どもは、たとへ理念的に西洋を克服したる新しき文学を建設しえたとしても、一朝にしてその足場の倒壊により、埋没せしめらるゝであらう」と国民文学以前に国民の足場たる倫理を問題化した上で、「まづ国民的倫理の革新の方嚮と結び付いた文学を」（二三頁）と、ここでも芸術性を擁した文学それ自体ではなく、西洋のそれと異なる「国民的倫理の革新」に寄与する文学ばかりが求められていく。

こうした様相が、昭和一〇年代末、太平洋戦争開戦から二年余がたつた時点での、文芸誌における「特輯 国民文学の大道」で示さ

れた、「新しい国民文学の方向」である。つまり、昭和一〇年代末には、もはや国民文学論は蒸発してしまっており、少なくとも狭義の文学（者）固有の問題は後景にかすんでいる。それでも、昭和一〇年代に展開された国民文学論が不毛だったとは決していえないことは、すでに論じてきたとおりである。

注

- (1) 内藤由直「『国民文学』とは何か」（『国民文学のストラテジー——プロレタリア文学運動批判の理路と隘路』双文社出版、二〇一四）、七頁。
- (2) 同書、一三頁。
- (3) 内藤由直「国民文学論の動因——〈政治と文学〉論争の問題」（『国民文学のストラテジー』前掲）、二四頁。
- (4) 小田切秀雄「日本の近代文学と国民文学」（日本文学協会編『日本の小説 II 日本文学講座 第五卷』東京大学出版会、一九五五）、一八九頁。
- (5) 同右。
- (6) 尾崎秀樹「戦時下の国民文学論」（『古典と近代文学』第五号、一九六九・一〇）、一六頁。
- (7) 同書、二〇頁。
- (8) 生松敬三「戦時国民文学論争」（『解釈と鑑賞』第二六巻第九号、一九六一・七）、七〇頁。
- (9) 平野謙「太平洋戦争下の国民文学論」（『文学』第二三巻第二号、一九五五・二）、一〇〇頁。
- (10) こうした局面も含め、昭和一〇年代における文学場の動向について、拙著『昭和一〇年代の文学場を考える——新人・太宰治・戦争文学』（立教大

学出版会、二〇一五）、『日中戦争開戦後の文学場——報告／芸術／戦場』

（神奈川大学出版会、二〇一八）参照。

（11）

後に、浅井中佐・馬杉少佐・牧洋・青木洪・木下俊・田中英光・崔載瑞・金鐘漢「軍人と作家 徴兵の感激を語る」（『国民文学』一九四二・七）において、牧は「保田與重朗さんのものは大和民族の一つの血の純血を護るといふか、余り偏った考へ方のやうに思ふのですが……。」と発言していた。これを受けて田中は「文章を書かれる時は半島の人、台湾の人といふやうなことを意識して書いてゐないからですよ。」（五二頁）と応じている。なお、牧洋は「国民文学の諸問題」（『緑旗』一九四二・四／引用は『緑旗（復刻版）オークラ情報サービス、二〇〇九）においても、「国民文学の問題に対する朝鮮文壇の態度は、未だに多く懷疑的であるやうだが、この現象は朝鮮の作家達の不誠実さに全部の責任があると云ふよりも、その幾分の責任は、内地文壇における国民文学論にもある」と指摘し、その理由を「それらの殆んど全部と言つていい位に、「民族」と云ふことを建前として居り、民族の伝統とか、民族の生活とか、伝承的国民性と言つたやうなものを基礎として論じて居るために、それが非常に国粹的であり、偏狭であるかの印象を与へる」（復刻版六五〇頁）点にみている。

（12）

小松伸六「戦争文学の展望」（荒正人編『昭和文学十二講』改造社、一九五〇）、一九一頁。

（13）

昭和一五（一九四〇）年前後、日本の文学場はアジアへの視線を前景化させていた。伊藤整・村山知義・今日出海「朝鮮・満洲をめぐりて」（『文学界』一九三九・九）や、芥川賞候補となり選評（『文芸春秋』一九四〇・三）で朝鮮民族という要素が注目された金史良「光の中に」（『文芸首都』一九三九・一〇）などを皮切りに、単行本では島木健作『満洲紀行』（創元社、一九四〇）が話題を呼び、雑誌では『文学界』が村山知義「朝鮮文学について」（『文学界』一九四〇・五）、韓植「朝鮮文学最近の動向」（同前）、木崎龍「満洲文学通信」（同前）以来、各地の動向を報告するよう

になり、『文芸』では「朝鮮文学特輯」（一九四〇・七）が組まれた。にもかかわらず、同時期に日本国内で展開された国民文学論では、周辺アジア各国・地域との関係が直接論じられることはなかった。

（14）

大東亜共栄圏構想の下に、欧米を対置した上で、日本を盟主とした大東亜の一体化を志向する言説については、拙論「第一回大東亜文学者大会の修辞学——大東亜共栄圏言説の亀裂」（『神奈川大学アジア・レビュー』第五号、二〇一八・三）で分析を試みた。